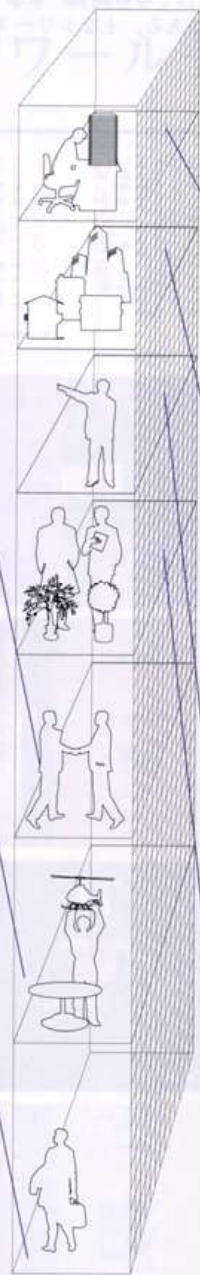




森的思考7

森博嗣さんが、某大学の工学部助教をしながら小説家デビューしたのは、1998年のこと。その後、驚異的なスピードで著作を世に送り出してきた。森さんの作品、創作手法、作家としてのスタンス、その随所に現れているのが「理系的思考」だ。7つの視点から森さんの思考回路に迫ってみよう。



1 タイトル決めに3カ月

2 物語の舞台をく鮮明に思い描く

3 5年先まで見越して仕事をする

4 文系、理系の区別こそ文系的発想

5 小説はビジネス

6 工学博士も小説家も創造する仕事

7 引き際もうちの計画

森的思考1
タイトル決めに3カ月
目次に添って物語を紡ぐ

森作品は、そのほとんどが文庫化新書化され、現在の総発行部数は約970万部（漫画や海外翻訳本を除く）を超える。

売れる本の条件の一つに、読者の興味をひいて本を手にとらせるようなタイトルの力があるだろう。森作品のタイトルを見ると、『封印再度』、『数奇にして模型』、『黒猫の三角』、『朽ちる散る落ちる』、『ゆは壊れたね』、『まどろみ消去』など、「おやつ」と思わせる謎掛けのような言葉の使い方が特徴的だ。

森さんには、タイトルを決める際の三カ条があるという。「読者は中身を読む前に、まずタイトルを見ますよね。その0・1秒か0・2秒の無意識のうちに、読んでみようかなと思わせる「形」をしていること、つまり見た目のインパクトが一つ。次に、発音したときの「リズム」。そして一番大事なのが、読んだときに意味がわからないような、ちょっとした「不思議さ」

があることです。読者とのファーストコンタクトはタイトルです。ミステリーが始まっているというわけだ。森さんの作品の創作過程において、タイトルは羅針盤的な役割を果たす。ストーリーを考えるより先に、タイトルを決めるといふ。次に冒頭の引用文、目次、登場人物と、読者が本を開いて読んでいく順に書き進めていく。「タイトルを先に決めておけば、そのタイトルに合わせて物語を書いていけばいいので、必然的にタイトルにピッタリの内容になります。目次にはページ数も書きます。目次に何ページと書いたから、そろそろ何か事件を起こして次章に行かないか」と思いながら書くわけ。多少の誤差は、後で戻って修正すればいい。「封印再度」を書いたときは、「封印を2回した物語にすればいい」と思って書いたのだという。

森さんの執筆スピードは、1時間間に6千文字、20万字程度の作品なら10日で書き上げてしまう。森さんにとって書くことはそれほど大変なことではないのだが、「むしろタイトルの考えるほうが大変」と明かす。

森的思考2
物語の舞台となる場所を鮮明に思い描く

メイントリックの大まかなイメージがあっても、構成はほとんど決まらずに第一章から書き始めるのが森さんの執筆スタイル。そのときに重要なのが、舞台設定だという。「僕の場合は、まず場所を決めます。建物はどこにあるのか、周りの地形はどうなっているのか。そこに登場人物たちを配置して、誰に何をさせる

森博嗣語録

森博嗣さんのインタビューで飛び出した、ハッとさせられる言葉を集めました。

※1 メモすることで人間は忘れる。「メモをせずだけでなく、名前がつけられると、人間は本質を忘れてしまうんです」「新人類」だとか何族だとか、名前をつけるそれが一斉に広がって、みんな納得するんです。それで安心して、ものを考えなくなる。」